

「女行者」論

— 『半七捕物帳』の世界 —

浅子逸男

『半七捕物帳』が芝居仕立てだということは、いまさら言うまでもあるまい。¹⁾

折にふれ『半七捕物帳』を読み返すという都筑道夫は、なかでも「春の雪解」がもつともすぐれていると述べ、

雪の入谷田圃を背景に、蕎麦屋で按摩と話をする、というところが、「天保六花撰」の片岡直次郎と、按摩の丈賀のであいを思わせる。情緒にとんだ幕あきで、三千歳のような出養生の花魁が、話の中心になってくる。

〔推理作家の出来るまで〕（下巻）平成12・12、

株式会社フリースタイル）

と、「天衣てんい紵あはだ上野初花」といかに重なりあっているかを絵解きし、『半七捕物帳』の魅力を語っている。

また、縄田一男は『半七捕物帳』と芝居との関連について次のように述べている。縄田の文中には「女行者」からの引用も含まれ、長い引用になるが、多くのことを教わりつつ、発展させていくためご容赦願いたい。

前期『半七捕物帳』でも、第三話「勘平の死」が、忠臣蔵の素人芝居の最中に起こった殺人を扱っていたり、第九話「春の雪解」の冒頭で「あなたはお芝居が好きだから、河内山の狂言を御存知でせう」と半七が話しはじめるように、事件の筋や登場人物を芝居に見立てて説明する箇所が随分あった。後の作者の言を借りれば、これすべて「読者もすでに御承知の通り、半七老人の話はとにかくに芝居がかりである」（第六十話「青山の仇討」）という言葉に収斂されるのであろう。

ところが、このような趣向や見立て以外のところで芝居に関する言及のあるのが、第二十六話「女行者」である。この作品の冒頭において、わたしは芝居見物にやって来た半七とぼったり出くわすのだが、時は明治三十二年秋、所は明治座、出しものは「天一坊」、初代左団次の大岡越前守、権十郎の山内伊賀之助、小団次の天一坊という配役であったと記されている。そして、二、三日後、赤坂の隠居所へ半七を訪ねていったわたしは、

わたしの予想通り、老人はなか／＼の見巧者であつた。かれはこの狂言の書きおろしを知つてゐた。それは明治八年の春、はじめて守田座で上演されたもので、彦三郎の越前守、左団次の伊賀之助、菊五郎の天一坊、いづれも役者ぞろひの大出来であつたなどと話した。というもので、さらに半七の、

「——今日までたび／＼舞台に乗つてゐるわけですが、やつぱり書きおろしが一番よかつたやうですな。いや、こんなことを云ふから年寄りはいつまでも憎まれる。は、は、は、は。」

という言葉でしめくくられている。

そして、ここで注目していただきたいのは、半七が見たという、明治八年、守田座（新富座）の「天一坊」（大岡政談）のことである。すでに本書の第一章でも触れたように、この守田座の「天一坊」は綺堂は「何の記憶も残つてゐない」というものの、母に連れられて、「兎もかくも私がこの世に生まれ出でてから劇場内の空気を呼吸した始め」（『歌舞伎往来』）の三歳の折に見たはずの芝居で、後に「因縁がある」とも「なんとなく懐しい」とも述懐してゐるところの狂言なのだ。そして、綺堂自身の「この狂言だけに就て云へば、黙阿弥の作中でも屈指の佳作であるやうに思はれる」という評価が、前述の「やつぱり書きおろしが——」という半七の台詞につながるわけで、ここで綺堂は、半七という自分より一世代前の人物の（記憶）をつくり上げることによって、まったく憶えていない芝居の素晴らしさを夢想している。換言すれば、半七は綺堂が持つていない（記憶）を、しっかりと脳裏に刻み込んでいる古老として描かれているわけである。

ところが、後期『半七捕物帳』になると、無論、こうした傾向はあるものの、半七の劇評は、綺堂さながらに

明治の演劇の同時代評の様相を呈してくる。

それが良く分かるのが、第五十三話「新カチカチ山」と、第六十話「青山の仇討」の冒頭部分である。

〔捕物帳の系譜〕平成7・4、新潮社)

縄田の指摘で重要なのは、「女行者」が半七と私とを芝居見物で出会わせ、半七老人に劇評を語らせていることと、後期『半七捕物帳』では同時代評の様相を呈してくるという二点である。ただ、氏は「女行者」の発表された時期と、改稿されたことに留意していないため、本稿ではこの縄田の意見に導かれつつ、作品の発表年代と「女行者」の改稿により、なぜ明治の演劇をリアルタイムで語れるようになったかを明らかにしたい。

現在、『半七捕物帳』は、初出誌にあたらな限り発表順で読むことはできない。かつて岸井良衛は早川書房版『定本半七捕物帳』（昭和41・2）^②の解説で「この全集は年代を調べて発表順に配列し、既刊本を参照校訂し、半七捕物帳としては初めての完本であらうと思ふ」と記しているのだが、初出誌にあたってみると発表順にはなっていないことがわかる。

縄田一男が読んだのは、第何話という順番と引用文の表記

から早川書房版の『定本 半七捕物帳』だと思われる。初出の「女行者」の本文には氏が引用する芝居話は出てこないのである。

「女行者」は『面白倶楽部』大正十三年一月号（9巻1号）に発表され、「捕物奇談」という角書が付されている。挿絵は大橋月皎が担当した。

初出ではK老人という呼び方をしたあとで、日野の息女の話が「桜姫」の芝居になったということを枕に話を始め、「K老人は其名を半七と云つて」と本筋に進めていく。

それが新作社版で「明治三十二年の秋とおぼえてゐる。わたしが久松町の明治座を見物にゆくと、廊下で半七老人に出逢つた。」という出だしに変わり、天一坊の芝居について書き加えられ、次のように過去の芝居話にうつる。

わたしの方から声をかけると、老人も笑つて会釈した。そこはほんの立話で別れたが、それから二三日過ぎてわたしは赤坂の家をたづねた。半七老人の劇評を聴かうと思つたからである。そのときの狂言は『天一坊』の通しで、先代左團次の大岡越前守、権十郎の山内伊賀之助、小團次の天一坊といふ役割であつた。

わたしの予想通り、老人はなか／＼の見巧者であつた。

かれはこの狂言の書きおろしを知つてゐた。それは明治八年の春、はじめて守田座で上演されたもので、彦三郎の越前守、左團次の伊賀之助、菊五郎の天一坊、いづれも役者ぞろひの大出来であつたなどと話した。

〔半七捕物帳〕第四輯 大正13・5、新作社)

このように「天一坊」の話から半七老人による芝居話が語られる。半七老人が見た「天一坊」の初演とは、後述するが明治八年二月の『扇音々大岡政談』³⁾で、綺堂がはじめて劇場に連れて行かれたときの狂言である。

ところが新作社版は第一輯の「お文の魂」で「私が半七に初めて逢つたのは、それから廿年の後で、恰も日露戦争が終りを告げた頃であつた」と初出どおりなので、「女行者」の加筆は矛盾することになった。「日露戦争が終りを告げた頃」に出会つたのなら、「明治三十二年の秋」に明治座で会うはずがない。私と半七が初めて出会つた時期と半七の生年は修正される必要が起きた。

その修正は春陽堂版（昭和4・1）の「お文の魂」で行われた。半七の生年と、私と半七とが出会つた時期を変えたことで、「女行者」に書かれた「明治三十二年」は矛盾しなく

なり、「女行者」の本文は新作社版以降変わりが無い。

『半七捕物帳』のなかでしばしば芝居について語られるが、明治座の「天一坊」について語るようにじつさいに何の役者どの役者が演じて、と目の当たりにすることく語るのは、新作社版で加筆した「女行者」からである。

「女行者」が発表されたのは大正十三年だが、執筆されたのは大正十二年八月のこと。『岡本綺堂日記』（昭和62・12、青蛙房⁴⁾）には、八月五日の項に、「面白倶楽部」の原稿を書く。六月中に五枚ほど書きかけたるを更に書きつゝけて、午前中に四枚」と記され、十二日には「十一時ごろまでに「面白倶楽部」の原稿をかく。あはせて四十二枚、題は「女行者」といふ」ということだそうである。十四日に「女行者」の原稿を速達便にて面白倶楽部に郵送」している。

翌月、綺堂は震災に遭う。つまり、「女行者」は震災前に書きあがり、出版社に送付され、翌年『面白倶楽部』に掲載された。

さて、綺堂は被災されたときの日記に残している。

九月一日（土曜）雨、晴

午前六時半起床。東南の風強く、雨をり／＼に烈しく降り来る。

下座敷に降りて執筆。十時ごろに国書刊行会の広谷君来りて、一時間ほど語る。

十一時半ごろに昼餐。

十一時五十八分烈震、おどろいて門外に逃げ出づ。(次、

二行アキ)

この後の記事混雑の際とて、一々記憶せず、たとひ記憶に存するとも一々記すに堪へず。市ヶ谷方面より燃え出でたる火は翌二日午前一時ごろに至りて元園町附近に襲ひ来る。何分にも風上とて油断しゐたると、余震強くして屋内に入ること危険なるにて、家財をに執着して怪我などありてはならずと、殆ど着のみ着のまゝにておえい、おふみを引き連れ、早々に紀尾井町の小林君宅へ立退く。予の宅はおそらく午前二時ごろに焼け落ちたるならんかと察せられる。

という有様であつた。揺れのために家屋が倒壊したのではなく、延焼のために焼け出されたのである。この記録が残された日記は、避難するときに持ちだされたもので大正十二年七

月二十五日から始まっている。それ以前の日記は灰燼に帰してしまつたのだが、先に引用したとおり、「女行者」の脱稿と郵送した月日が明記された箇所は残された。

震災の前までに『半七捕物帳』第二輯まで刊行していた新社から、第三輯を出版するという連絡を受ける。十月十九日の日記である。

……新作社の佐藤君が来て、半七捕物帳第二輯印税の残りをくれ、この際思ひ切つて第参輯を出版してみると云つて、兎もかくも千部だけの奥付の捺印を求め、あはせて第一輯第二輯各参百部の捺印を求めゆく。

奥付によると第三輯は、大正十二年十一月一日印刷、大正十二年十一月五日発行である。だが、はしがきには大正十二年八月と記されている。第三輯は震災前にすでに準備されていたのである。

ここで第三輯に収録された「半七先生」に触れておく。「半七先生」は初出が見つかからない作品である。そのためいつ書かれたのかはわからない。新社出版第三輯に収められた本文では「わたしが半七老人を識つたのは、明治廿七八年の日清戦争以後で、老人はその頃赤坂に住んでゐた」と書き出され

ている。この一文は春陽堂版で削除され、その後の刊本では読むことができない。削った理由としては、新社版のなかで矛盾するためだとも考えられるが、そうすると、第四輯に収められた「女行者」が半七の設定と矛盾する書き換えをしたことが不思議である。

では「女行者」の書き加えについて述べることにする。

初出本文は、「K老人は江戸の生まれで、江戸のことをよく知つてゐた。老人がこんな話をした。」という書き出しで始まる。現行流布本の出だしは第四輯で書き足されたものである。その部分を引用するが、初出の「女行者」ではまったく書かれておらず、重なる部分すらない。

先に引用した縄田一男の文章のなかで採っていた箇所を含んでいるが、新出版社版第四輯から引き写す。

明治三十二年の秋とおぼえてゐる。わたしが久松町の明治座を見物にゆくと、廊下で半七老人に出逢つた。

『やあ、あなたも御見物ですか。』

わたしの方から声をかけると、老人も笑つて会釈した。

そこはほんの立話で別れたが、それから二三日過ぎてわたしは赤坂の家をたづねた。半七老人の劇評を聴かうと

思つたからである。そのときの狂言は『天一坊』の通しで、先代左團次の大岡越前守、権十郎の山内伊賀之助、小團次の天一坊といふ役割であつた。

わたしの予想通り、老人はなか／＼の見巧者であつた。かれはこの狂言の書きおろしを知つてゐた。それは明治八年の春、はじめて守田座で上演されたもので、彦三郎の越前守、左團次の伊賀之助、菊五郎の天一坊、いづれも役者ぞろひの大出来であつたなどと話した。『御承知の通り、江戸時代には天一坊をそのまゝに仕組むことが出来ないのです、大日坊とか何とか云つて、まあ好加減に胡麻化してゐたんですが、明治になつたので既う遠慮はいらなうといふことになつて、講釈師の伯円が先づ第一に高座で読みはじめる。それが大当りに當つたので、それを種にして芝居の方でも河竹が仕組んだのですが、それが又大当りで、今日までたび／＼舞台に乗つてゐるわけですが、やつぱり書きおろしが一番よかつたやうですな。いや、こんなことを云ふから年寄はいつでも憎まれる。は、は、は、は、。』

芝居の話がだん／＼に進んで、天一坊の実録談に移つて来た。

という出だしに変えられたのである。このあとは初出も新出版社もほとんど同じである。初出では、私が半七老人に出会った年月も書かれていなければ、芝居見物の話も出てこない。それが、右の引用文のように書きこまれたのである。

新出版社第三輯が十一月に刊行されると、第四輯を発行しようという話になる。翌大正十三年三月二十六日の日記に、「半七捕物帳」の旧稿を訂正。新出版社から第四輯を催促して来たからである。何かと忙しいので閉口である」と記される。

このような記述から、新出版社は最終的に全五巻として刊行されたが、はじめから何巻を予定して依頼したのかは不明である。また、新出版社版に収録するためにさまざま手直しをしているのである。四月一日の日記には「新出版社では引きつづいて「半七捕物帳」第四輯を発行するといふので、旧稿を訂正。これもなか／＼面倒である」と書かれ、いよいよ本格的に改稿作業にかかりはじめたようである。四月三日の日記に「それから「半七捕物帳」の旧稿を訂正し、あはせて小序をかく。これで第四輯の分も纏まつた」とある。四月十二日には「冬の金魚」を訂正して新出版社に郵送。捕物帳の追

加である」と記されている。

第四輯を見ると、大正十三年五月廿五日発行と記載され、「冬の金魚」は末尾に収録されている。

「女行者」の書き加えは、大正十三年三月下旬から四月のはじめになされたものである。

半七はもともと元治元年の事件のとき、三十歳になるかならないかであった。「お文の魂」の初出では「三十前後の瘦ぎすの男」で、「私が半七に初めて逢つたのは、それから廿年の後で、恰も日露戦争が終を告げた頃」という設定である。新出版社版に収録されたところで、「三十三の瘦ぎすの男」で、「私が半七に初めて逢つたのは、それから廿年の後で、恰も日露戦争が終りを告げた頃」と書かれ、年齢の書きかたがわずかに変えられる。

その新出版社版の第四輯で、わたしは「明治三十二年の秋」に半七老人と出会っているのである。明治三十二年では日露戦争は終わるところか始まってもないのに。

第三輯と第四輯のあいだで、どのような変化が起きたのだろうか。

第三輯は、先に述べたように、震災前に出版社に原稿を渡

していた。第四輯は、震災後に第三輯が刊行されたのちに依頼されている。

半七老人が「女行者」で語ったのは、綺堂がはじめて見た芝居であった。

大正九年に綺堂が「過ぎにし物語」で記した芝居を、大正十三年に「女行者」を新作社版に収録するさいに書き加えた。半七老人と出会った明治座は関東大震災で焼失してしまった。いや、明治座だけではない。半七老人が「天一坊」の初演を見たと言う新富座も震災で焼けてしまったのである。半七老人が語った「明治八年の春、はじめて守田座で上演された」芝居とは「扇音々大岡政談」である。綺堂はこう記している。

わたしが生れてから初めて、劇場といふもの、空気の中に押込まれたのは、明治八年の正月であった。この年から守田座が新富座と改称したので、その一月興行は

『扇音々大岡政談』——例の天一坊——で、それを書き

卸した作者の河竹黙阿弥翁はその当時六十歳であったといふことを後に知った。いや、後に知つたのはそればかりでない。その狂言が大岡政談の天一坊であるといふことも、後に初めて知つたからで、その当時二歳と三ヶ

月ばかりの私は無論何も知らなかつた。実はその新富座へ連れて行かれたといふことすらも、私の幼い記憶には何にも残つぬないのであるから、あるひは欺されてゐるのかも知れないが、親や姉などの云ふことを信用して、先づさう決めて置く。して見ると、日本の劇といふものと私との間に一種の連鎖の出来たのは、新富座といふ劇場が初めて東京に出現した当時からのことである。ふり返つて見ると、かなり長い。熊谷を気取つて夢だとも云ひたくなる。

（「過ぎにし物語—明治時代の劇と私と」

〔新演芸〕大正九年八月）

さらにこの守田座（新富座）については次のような記述がある。

この劇を初めて見物する前に、わたしは初て彼の守田勘彌——新富座の座主で今の勘彌の父——といふ人に逢た。この前年の六月、新富座新築の開場式に在京の各外国人を招待したので、その時おなじく招待をうけた英国公使館の外国人等が主唱者となつて各外国人から何か新

富座へ贈物をするといふことになった。わたしの父は英國公使館に勤めてゐて、且は團十郎とも予て識つてゐる關係から、一応それを新富座に交渉すると、勘彌は非常によるこんで、記念のために何うか引幕を頂戴することは出来まいかと云つた。そこでいよ／＼その引幕を贈ることになつて、翌年の二月興行から新富座の舞台にかけられた。

という経緯があつた。その新富座も焼失したのである。

河竹繁俊は『日本演劇全史』にこう記している。

まず第一に、建築および旧蹟の焼失である。即ち震災により当時二十二座あつた劇場のうち、二十座まで失なつた。歌舞伎座・帝劇・有楽座・明治座・市村座・新富座・神田劇場・辰巳劇場・寿座・宮戸座・公園劇場・常盤座・御園座・観音劇場・御園劇場・帝京座・十二階劇場・中央劇場・演伎座等である。そのうち、新劇に大きな貢献をした有楽座のほかは、いずれも歌舞伎中心の劇場であつた。

このうち新富座は、明治十一年六月にあの画期的開場

式を行なつた、文化的価値を誇る建物であつた。この焼失により、江戸の風趣を残した劇場は永久に失なわれたのである。

そして、昔の俳優、作者の家をはじめ、古い芝居小屋の遺跡、歌舞伎に由緒深い大川端の雅致ある史蹟等の数々も、おおむね失なわれたといつてよかつた。むろん第二次大戦の惨禍によりそれは再び完膚なきまでに破壊されたのだけれども、その文化財損失の程度は、震災の方がはるかに大であつた。

(『日本演劇全史』昭和34・4、岩波書店)⁴

河竹が記している「明治十一年六月にあの画期的開場式」が、綺堂が「この前年の六月、新富座新築の開場式に在京の各外国人を招待した」と書いている開場式である。綺堂がこう記したのは大正九年のこと、震災の前なので新富座は健全だった時である。

「女行者」は大正十二年八月、震災の直前に脱稿し、翌年『面白倶楽部』に掲載されたが、新社版に収めるにあたって改稿した。そこに明治座と守田座（新富座）で演じられた芝居について書きこんだのである。

明治三十二年、明治座で演じられた「天一坊」とは、『演劇外題要覧』（昭和12・2、日本放送出版協会）によれば、「大岡政談雪墨附」という外題で上演された芝居で、明治八年の「扇音々大岡政談」の別名題である。

綺堂が初めて見た芝居を半七老人に語らせ、それを語るきっかけのために半七老人と私とを明治座で出会させた。「天一坊」を語らせるために明治三十二年でなければならなかった。そうすることによって新社版のなかでの設定を崩すことになっても。「女行者」を書き直すということは、震災で焼け失せてしまった明治座と新富座を偲ぶことでもあった。「過ぎにし物語」では、菊五郎團十郎の没後の芝居について次のように記している。

「團十郎菊五郎がゐなくなつては、木挽町も観る気になりませんね。」
かういふ声をわたしは度々聞かされた。團菊の後に洪水あるべきことは何人も予想してゐたのであるが、その時がいよゝゝ来た。

（團十郎の死 過ぎにし物語―続編の十三）

（『新演芸』大正十四年二月）

「過ぎにし物語」は、大正九年八月から十一年五月まで連載し、大正十三年一月から続篇を再び連載する。続編の二に「今度の続編は明治三十六七年、すなはち團菊左の最後を以て筆をとめることにしようと思つてゐる。わが劇界のこの三名優の死によつて、一区画をなしたとも云ひ得られる」と記したとおり、終わりの三章をこの三人の死にあてている。震災によつて資料も失つてしまった綺堂としては、語つておかなければならないと感じたのではないだろうか。

『半七捕物帳』は、書きはじめられたときの設定では、團菊左を目の当たりにするようには書けなかつたのである。日露戦争が終わりを告げた頃では彼等はいなくなつていたのである。いや、むしろ團菊左の死後に半七老人に出会うことにより、作中で語れないようにしたのではないだろうか。それを震災によつて封印を解いたのである。團菊時代と呼ばれる時期にわたしは半七老人に出会つた。それが明治座である。「天一坊」を語れば守田座にも触れざるをえない。江戸の残党は後日の俤を語りはじめたのである。

『半七捕物帳』初出一覧

初出 ・ 大正6年1月から（最初は『文芸倶楽部』）、発表順に記している。
 単行本・平和出版社『半七捕物帳』（大正6・7）（ほぼ初出どおり）

隆文館『半七聞書帳』（大正10・6）（「人形使ひ」が「人形の怪」という題名で収録されるが、新社版で「人形使ひ」に戻される。本文はほぼ初出どおり）

新社 『半七捕物帳』全五冊（大正12・4・14・4）（異装本あり）
 春陽堂 『半七捕物帳』全二冊（昭和4・1）

題名	初出誌	発表年月	単行本	新社版
お文の魂	文芸倶楽部	大正6・1、23卷1号	↓『半七捕物帳』	↓第一輯
石燈籠	文芸倶楽部	大正6・2、23卷3号	↓『半七捕物帳』	↓第一輯
勘平の死	文芸倶楽部	大正6・3、23卷4号	↓『半七捕物帳』	↓第一輯
湯屋の二階	文芸倶楽部	大正6・4、23卷5号	↓『半七捕物帳』	↓第一輯
お化師匠	文芸倶楽部	大正6・5、23卷7号	↓『半七捕物帳』	↓第一輯
半鐘の音	文芸倶楽部	大正6・6、23卷8号	↓『半七捕物帳』	↓第二輯
奥女中	文芸倶楽部	大正6・7、23卷9号	↓『半七捕物帳』	↓第二輯
帯取の池	文芸倶楽部	大正7・1、24卷1号		↓第一輯
春の雪解	文芸倶楽部	大正7・2、24卷3号		↓第一輯
朝顔屋敷	文芸倶楽部	大正7・3、24卷4号		↓第一輯
山祝ひ	探偵雑誌	大正7・3春期特別号		↓第二輯
お照の父	文芸倶楽部	大正7・4、24卷5号		↓第三輯
猫婆	文芸倶楽部	大正7・5、24卷7号		↓第一輯
筆屋の娘	文芸倶楽部	大正7・6、24卷8号		↓第一輯
河瀬（初出未見）（「広重と河瀬」の後半）	娯楽世界	大正7・9（未見）		↓第二輯
踊の浚ひ（「少年少女の死」の前半）	新小説	大正7・10、23卷10号		↓第三輯
三河萬歳	文芸倶楽部	大正8・1、25卷1号	↓『半七聞書帳』	↓第五輯

題名	初出誌	発表年月	単行本	新出版社版
化銀杏 江戸捕物奇談	娯楽世界	大正8・1、7卷1号		↓第三輯
槍突き 半七聞書帳巻の二	文芸倶楽部	大正8・2、25卷3号	↓『半七聞書帳』	↓第四輯
人形使ひ 半七聞書帳巻の三	文芸倶楽部	大正8・3、25卷4号	↓『半七聞書帳』	↓第四輯
向島の寮 半七捕物奇談	娯楽世界	大正8・3、7卷3号		↓第三輯
広重の絵(「広重と河瀬」の前半)	婦女界	大正9・1、21卷1号		↓第二輯
張子の虎 半七聞書帳後篇の一	文芸倶楽部	大正9・4、26卷5号	↓『半七聞書帳』	↓第五輯
甘酒売 半七聞書帳後篇の二(「あま酒売」と改題)	文芸倶楽部	大正9・5、26卷7号	↓『半七聞書帳』	↓第四輯
小女郎狐 半七聞書帳後篇の三	文芸倶楽部	大正9・6、26卷8号	↓『半七聞書帳』	↓第五輯
旅絵師 半七聞書帳後篇の四	文芸倶楽部	大正9・7、26卷9号	↓『半七聞書帳』	↓第三輯
津の国屋 捕物奇談	娯楽世界	大正9・6、9・8、8卷6、8号		↓第二輯
熊の死骸 半七聞書帳後篇の五	文芸倶楽部	大正9・8、26卷11号	↓『半七聞書帳』	↓第五輯
松茸 半七聞書帳後篇の六	文芸倶楽部	大正9・9、26卷12号	↓『半七聞書帳』	↓第五輯
鷹匠 御存半七捕物帳(「鷹のゆくへ」と改題)	文芸倶楽部	大正11・1、28卷1号		↓第二輯
蛙の水出し(「少年少女の死」の後半)	サンデー毎日	大正11夏期臨時増刊		↓第三輯
弁天娘	講談倶楽部	大正12・6、13卷8号		↓第二輯
雷獣 江戸物語(「雷獣と蛇」の前半)	婦人世界	大正12・8、18卷8号		↓第三輯
鬼娘	講談倶楽部	大正12・9、13卷13号		↓第三輯
異人の首	週刊朝日	大正12・10月増刊号		↓第四輯
女行者	面白倶楽部	大正13・1、9卷1号		↓第四輯
潮干狩(「海坊主」と改題)	新青年	大正13・1、13・2、5卷1、3号		↓第四輯
*江戸文学に現れた探偵物語	新青年	大正13年新春増刊号、5卷2号		↓第四輯
仮面	新青年	大正13・4、5卷5号		↓第四輯
冬の金魚	講談倶楽部	大正13・4、5、14卷5、7号		↓第四輯
一つ目小僧	サンデー毎日	大正13年夏期特別号、3卷29号		↓第五輯
柳原堤(「柳原堤の女」と改題)	旬刊写真報知	大正14・1・5、14・2・15、3卷1、5号		↓第五輯

題名	初出誌	発表年月	単行本
蝶合戦	講談倶楽部	大正14・4、15卷4号	↓第五輯 新作社版
むらさき鯉	講談倶楽部	大正14・8、15卷10号	
三つの声	新青年	大正15・1、7卷1号	
*半七捕物帳の思ひ出	文芸倶楽部	昭和2・8、33卷10号	
白蝶怪	日曜報知	昭和7・2・28、7・6・5、92、106号	
半七捕物帳第一篇 十五夜御用心	講談倶楽部	昭和9・8、24卷8号	
半七捕物帳第二篇 金の蠟燭	講談倶楽部	昭和9・9、24卷9号	
半七捕物帳第三篇 ズウフラ怪談	講談倶楽部	昭和9・10、24卷10号	
大坂屋花鳥 半七捕物帳第四話	講談倶楽部	昭和9・11、24卷11号	
正雪の絵馬 半七捕物帳第五話	講談倶楽部	昭和9・12、24卷12号	
大森の鶏 半七捕物帳	講談倶楽部	昭和10・1、25卷1号	
妖狐伝 半七捕物帳第七話	講談倶楽部	昭和10・2、25卷2号	
新カチカチ山 半七捕物帳第八話	講談倶楽部	昭和10・3、25卷3号	
唐人館 半七捕物帳第九話	講談倶楽部	昭和10・4、25卷4号	
かむろ蛇 半七捕物帳第十話	講談倶楽部	昭和10・5、25卷5号	
河豚太鼓 半七捕物帳第十一話	講談倶楽部	昭和10・6、25卷6号	
幽霊の観世物 半七捕物帳第十二話	講談倶楽部	昭和10・7、25卷7号	
菊人形 半七捕物帳第十三話(菊人形の昔と改題)	講談倶楽部	昭和10・8、25卷8号	
蟹のお角 半七捕物帳第十四話	講談倶楽部	昭和10・9、25卷9号	
青山の仇討 半七捕物帳	講談倶楽部	昭和10年臨時増刊、25卷10号	
吉良の脇指 半七捕物帳	講談倶楽部	昭和10・10、25卷11号	
歩兵の髪切り 半七捕物帳第十七話	講談倶楽部	昭和10・11、25卷12号	
川越次郎兵衛 半七捕物帳	講談倶楽部	昭和10・12、25卷13号	
廻り燈籠 半七捕物帳	講談倶楽部	昭和11・2、26卷2号	
*半七紹介状	サンデー毎日	昭和11年秋季特別号、15卷44号	

題名	初出誌	発表年月	単行本	新出版社版
夜叉神堂 半七捕物	キング	昭和11年臨時増刊、12卷13号		
地蔵は踊る 半七捕物	講談倶楽部	昭和11・11、26卷13号		
薄雲の碁盤 半七捕物帳	講談倶楽部	昭和12・1、27卷1号		
二人女房 半七捕物帳	講談倶楽部	昭和12・2、27卷2号		

初出不明

雪達磨

半七先生

雷獣と蛇（「蛇」の部分）

狐と僧

注

- (1) 拙稿「御用! 『半七捕物帳』」(『殺説』X号、平成6・7)などに述べてきた。
- (2) 早川書房版の『定本 半七捕物帳』は、昭和三十一年と昭和四十一年に同じ装丁で刊行されている。
- (3) 「過ぎにし物語 明治時代の劇と私と」(『新演芸』大正9・8)
- (4) 『岡本綺堂日記』は、平成元年九月、再版による。
- (5) 『日本演劇全史』は、昭和五十四年二月、第五刷発行による。

〔付記〕

本稿は、二〇一五年度花園大学研究助成(特別個人研究)を受けることによって執筆することができました。記して感謝の意を表します。